

## 地域情報（県別）

### スポーツ医療に注力する狙いが当たり、患者の半数は20代までの若者—武蔵野アトラスターズスポーツクリニック院長の丸野秀人氏に聞く◆Vol.2

2019年7月2日（火）配信 m3.com地域版

「スポーツチームと連携するクリニックを作りたい」——。そんな企業の構想から生まれた「武蔵野アトラスターズスポーツクリニック」（東京都武蔵野市）には現在、スポーツに取り組む子どもや若者が多く来院しており、20代までの患者がおよそ半数を占める。丸野秀人院長は日本の部活動に医療的な視点が欠けていることを憂慮し、「各学校や部活がかかりつけの整形外科を持ったり、当院のようなスポーツ医療に注力するクリニックが増えたりすることで問題の解決に近づけるのでは」と提案する。（2019年4月16日にインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——「スタッフがスポーツ医療の難しさを知っている」とのことですが、その難しさとは。

単に病気の回復をめざせば良いわけではないことです。一般整形では患者さんがとりあえず日常生活を問題なく送れるようになればいいことが多いわけですが、スポーツ選手の治療やリハビリを行う場合、チームがその選手に求めていること、または選手自身がプレーを行う上で求めていることを考慮する必要があります。

例えば、試合のスケジュールの関係でいつまでに復帰する必要があり、その際にどの状態まで上げたいか、といったことです。治療やリハビリの効果を出す期間とそのレベルにおいて求められることが一般整形に比べて明確かつハードルが高いことが多いため、難しさが伴うわけですね。逆に言えばこういった要望を踏まえて診療や施術を行い続けているスタッフが揃っていることで、他の整形外科との差別化を図れているのではないのでしょうか。



院長の丸野秀人氏

——そういった特性から、やはりスポーツをしている人が患者として多く訪れている？

はい。当院の患者さんは20代までの方が約半数を占めており、これはご高齢の方が多い一般的な整形外科とは顕著に異なる特徴です。中でも大学生や社会人だけでなく、中学生と高校生が多いのには驚きました。社会人チームやプロの選手に比べてスポーツへの力の入れようが小さいであろう子どもたちがこんなに困っているのか、と。また、患者さんの取り組んでいるスポーツはやはりラグビーが多いのですが割合としては10%台。割とさまざまなジャンルに散らばっています。

——患者に中学生や高校生が多いというのは印象的です。頑張りすぎ、ということなのでしょうか。

そうですね。体の使いすぎ、オーバーユーズです。今まで、重い病気を診ることの多い病院に勤めていたから余計にそんな印象を受けやすいのかもしれないですが、それにしても子どもの患者さんが多いなと感じています。部活動の伝統なのか教育者の指導に起因するのかはっきりとしないことが多いのですが、子どもたちは「休めない」と言うんですね。周囲の生徒からの目、指導者の目を気にして、休むことに対して過剰に自責の念を抱く子が多いのは心配です。総じて、日本の部活動にはまだ医療的な視点が欠けているのではないのでしょうか。

——そんな背景があるとすると、同院のようなクリニックが増えれば……。

問題の解決につながるかもしれません。例えば、早稲田実業学校にはアスレチックトレーナーが常駐していて、部活生は体に異常があるとすぐにそのトレーナーに相談できます。スポーツに力を入れている私立学校だからこその体制ですが、ここまでできなくても、各学校や各部活がそれぞれにかかりつけの整形外科医を持っておくようにすれば、子どもたちの問題の早期発見を図れるでしょう。その上で当院のようなスポーツ医療に注力するクリニックが増えれば、小学校から高校までの部活動を医学的にフォローしようという文化が広がっていくのではないのでしょうか。



同院のリハビリ室

——整形外科とリハビリテーション科以外に、女性アスリート向けの婦人科も掲げていますね。これも特徴だと思います。

女性アスリート向けの婦人科は偶数週の土曜日に開いていて、杏林大学の産婦人科医であり、日本スポーツ協会が公認するスポーツドクターでもある百村麻衣先生が担当しています。スポーツに取り組んでいる女性の中には、競技を頑張っているが故に月経に乱れが起こるなどして悩んでいる方もいらっしゃいます。そんな方々の悩みを軽減できないかと思って設けたのですが、開院してからの受診者はまだ数人。ニーズはあるはずなので、婦人科に特化したパンフレットを作るなどして周知していきたいですね。

それと、この婦人科外来の開設には、横河武蔵野アトラスターズの関連チームに「横河武蔵野アルテミ・スターズ」という女子ラグビーチームがあることも関係しています。オリンピックの施設などには女性アスリート外来があるので地域にもあった方がいいだろうと思ったことに加え、女性に特化したサポートがあればチームに入りたくる人が増え、結果的に地域活性化につながるのではないかと考えました。

——現在の運営状況についてはいかがでしょうか。

開院から8カ月の現在、1日に60～80人ほどの患者さんにご来院いただいています。まだ支出の方が多く、当面はこの倍くらいの集患を図ることが目標です。

横河武蔵野アトラスターズは以前、武蔵野市にある工業機器メーカー「横河電機」が所有していたチームでしたが、現在は同社と切り離され、NPO法人が母体になっています。横河電機をはじめとした複数の企業をスポンサーに得ながら、地域に根差したスポーツチームに成長していこうとしているところなんです。

その意味で、当院も収入が一定額に達したら余剰分をこのNPO法人に渡して、チームの運営に役立ててもらおう考えです。地域のスポーツ振興にも貢献していきたいと考えています。

——最後に、今後の展望をお聞かせください。

地域でスポーツに取り組む人たちのための医療的な拠点を目指しつつ、今後は整形外科疾患にかかりやすい高齢の方を対象にした教室を開催したり、医療的なフォローが少ないと思われるチームに出向いて講演したりと、積極的に地域に出向いていきたいと考えています。

また、当院ではリハビリにも力を入れているので、同業の先生方にもっと利用してもらえると嬉しいです。「武蔵野市にスポーツ医療に注力しているクリニックがあるから患者さんに教えてあげよう」。そんな風に思われるようになっていきたいです。

◆丸野 秀人（まるの・ひでと）氏

1998年に杏林大学医学部を卒業後、同整形外科教室に入局。大月市立中央病院整形外科部長や新潟手の外科研究所フェロー、佼成病院整形外科医長・リハビリテーション科部長を歴任しつつ、スポーツ医療にも注力。社会人ラグビーチーム横河武蔵野アトラスターズなどのチームドクターも務める。2018年8月、武蔵野アトラスターズスポーツクリニックの院長に就任。自身も小学3年からラグビーに親しむ。

取材・文／医療ライター庄部勇太



記事検索

